

「福音主義 (evangelicalism)」を定義することは簡単なことではない。そればかりか、ますます難しくなっている。種々雑多な人びとが自らに「福音主義」というラベルを貼るようになったからである。この用語にまともな定義が見つからないので、そうすることが神学的には無意味であると指摘する人びともいる。

2012 Carson, *Evangelicalism: What Is It and Is It Worth Keeping?*

D.G. Hart, *Deconstructing Evangelicalism: Conservative Protestantism in the Age of Billy Graham* (Grand Rapids MI: Baker Academic, 2004).

## I. 福音主義の歴史的定義づけを試みた研究者たち

●George Marsden : (ジョナサン・エドワーズ研究から始まって、アメリカの福音主義の教会史家、元University of North Carolina—Mark Noll が引き継ぐ。ちなみにNathan Hatchも同大学でNollの同僚であった。)

1984年 ①聖書を最的権威とする宗教改革の聖書観、②聖書に記録されている神の贖いの御業を史的出来事と受け止める歴史観、③キリストのみを信じる信仰による救い、④伝道への情熱、霊的に変貌していくキリスト者の生活<sup>\*1</sup>

●1989 David Bebbington (スコットランドの英国歴史家)

*Evangelicalism in Modern Britain: A History from the 1730s to the 1980s*

①回心・新生主義、②行動主義 (伝道と慈善)、③聖書主義、④十字架と信仰

——Bebbington quadrilateralと呼ばれるようになる

●1996 Alister McGrath, *Evangelicalism and the Future of Christianity* (「福音主義とキリスト教の将来」) ①キリスト中心主義、②聖書の最終権威、③回心と新生の強調、④伝道への情熱

## II. Bebbington Thesis——争点となってきたこと

教会史の研究書に30年に一冊出るかでないかの教会史の名著。発行されて今に至るまで福音主義の研究者が必ず対話を強いられ、触発され、あるいは批判の対象となる書物。

実証的にphenomenologicalに書かれていて (歴史家)、福音主義の神学的前提 (「こうあるべきもの」) をもって書かれていない。

### A. 福音主義の特色

B. 福音主義の胎動を1730～ (大西洋を挟んでエドワーズ、ホイットフィールド、ウェスレー) とする。

福音主義が17世紀にex nihilo突如として出現したわけではない。歴史的な文脈、特に英国ピューリタニズム、ドイツ敬虔主義との関連を認識しながらも、"There was a new phenomenon of the eighteenth century." (Bebbington,1)

①反対論 (懸念) ——17世紀のピューリタニズムとパイエティズムとの継続性を強調

i. 17世紀英国のピューリタンは、聖書主義、敬虔な生活、伝道、小グループという同じアジェンダを掲げていた。また、また国教会からの弾圧を逃れてオランダに移住し

---

\*1Marsden, George. "Introduction: The Evangelical Denomination." Ed. George Marsden. *Evangelicalism and Modern America*. Eerdmans Publishing Co., 1984.

たピューリタンを中心にDutch Further Reformationも見逃せない。1630年頃には、人口の60%がオランダ改革派に属するほどの広がりを見せ、その特色は、sound doctrine and pietyであった。(現代では、アブラハム・カイパーなどにその特色を見る)

- ii. シュペーナーに始まるドイツ敬虔派、またツィンツェンドルフ率いるモラビア派は、世界伝道を掲げ、英国、さらに米国と翼を広げる。あるいは、フランスのプロテスタント、ユグノーもジュネーブ改革派の伝道の結果として評価できるのではないか。<sup>\*1</sup> 同様に北欧(スウェーデン、フィンランド、ノルウェー)へのルター派の進出

②賛成論——福音主義には、信仰復興運動(リバイバリズム)とそれの背景にある宗教社会色がある。マーク・ノルの論を引用。*The Rise of Evangelicalism* (2004)

- ・17世紀ピューリタンは、その霊想書は別としても、全体的に国教会の前提があり、依然として「the ideal of a comprehensive, unified society」側に立っている。
- ・福音主義が胎動していくとき、「correct doctrineによって守られるキリスト教信仰から、correct livingによって守られるキリスト教信仰へとシフトしていく」
- ・16世紀は未だ、フォーマルな神学教育を受けた立派な牧師によって守られる教会というイメージが強く、17世紀の信仰復興運動と共に、教会は信徒の集まり、信徒が教会を担うという姿勢が出てくる。

③個人的に

- 教会史を輪切りにすることはできないが、それでも、1730年代は大西洋を挟んで、独特な人の動きがあり、世界は大きく動く。
- J.I. Packer and Thomas Oden, *One Faith: Evangelical Concensus*のように、福音主義を16世紀の宗教改革まですべて含めることは神学的には可能である。が、その時代の特性・その中における展開を考えるとかえって今日の福音主義の独自の強調・時代性・問題点が見えなくさせてしまう。
- 原点的な時代、出来事、人物を見失うと、「福音主義」はHartが言う、単なる「umbrella term」に墮してしまふ。

### C. 啓蒙主義は福音主義の味方か？

これまで、生き生きとした福音体験は、啓蒙主義・合理主義に対する反動として理解されてきた。(たとえば、1966年のジョン・ウォルシュの論文は、リバイバリズムが福音体験を強調するとき、それは無神論的な啓蒙主義精神への反発であり、合理主義に染まる当時の教会神学への反動であったと解釈している<sup>2</sup>。)

これに対して、ベビントンは、その逆の解釈を提示した。ベビントンは、ジョン・ロックの説く、個人の経験こそが真の知識の源泉となるとの認識論は、18世紀英米の福音主義の中に取り入れられ、神についての真の知識は個人的な神経験、神との出会いを源泉とするとの理解に至ったと言う。“The activism of the Evangelical movement sprang from its strong teaching on assurance. That, in turn, was a product of the confidence

---

\*1 Alister McGrath, *The Life of John Calvin*, 1991-92.

\*2 John D Walsh, “Origins of Evangelical Revival,” in G.V. Bennett and J.D. Walsh (eds), *Essays in Modern Church History: In Memory of Norman Sykes* (London: A.C. Black, 1966), pp.132-162.

of the new age about the validity of experience. The Evangelical version of Protestantism was created by the Enlightenment."(Bebbington, 74)

### Ⅲ. 胎動期における福音主義の特色

#### 1. 意識的な回心体験と十字架を信じる信仰 (fiducia)

##### ● ウェスレー

21歳で英国国教会の助祭となり、後に司祭、また大学の研究員となったウェスレーは、1729~1735まで大学で神聖クラブ（オックスフォード・メソジスト）を指導していた。クラブでは、初代教会を学び、その実践をまね、刑務所や病院を巡り、貧しい子どもたちのために学校を始め、善行を尽くしてホーリネスを追求していた（その背後には、17世紀国教会の道徳神学と霊性、ピューリタンの実践と霊性があった）。その彼がオックスフォード満足せず、1735年にアメリカのジョージアでの宣教に乗り出す。――ただキリストのように生きることを願って、ジョージアへ。

そして、そこでドイツから移住してきたモラビア派のシュパンゲンベルク（元ハレ大学の神学部の教授）のひと言で、彼の信仰理解はゆらいでゆく。

「兄弟、それでは初めに質問させていただきます。あなたは、自分の内に確証がありますか、自分が神の子であるということ、自分自身の霊とともに、神の御霊は証ししていますかと尋ねた。

私は驚いてしまった。なんと答えてよいかわからなかった。彼はそれに気づいたのか、続けて“あなたはイエス・キリストを知っていますか”と尋ねた。私は少し間をおいて、“主がこの世界の救主であるということを知っています”と答えた。すると彼は、“確かにそうです。しかし主があなたを救われたということを知っていますか”と尋ねた。

私は答えた“主が死なれたのは、私をも救うためであったことを望んでいます”。それに対して、彼は“あなたは本当に自分自身を知っていますか”と加えただけであった。“はい。知っています”と答えたものの、それらが空しい言葉であると自分では判っていた。

単刀直入な質問によって、ウェスレーの自信は揺らぎ始めた。人を救う信仰、十字架への信頼が自分には欠けている。彼は、英国国教会、また彼が学んできたピューリタニズムには欠けていた信仰義認の教えをモラビア派から学んだ。1738年2月に英国に戻った時点、彼は日記に次のように記している。

自分の心の中には死の宣告を持ち、自分の中には自分について弁護できるようなことは何も持っていない。それ故、キリストにある贖いを通して自由に義とされるということを除いては私には何の希望もない。……キリストを信じる信仰による義、即ち、信仰によって神から与えられる義をもつことがだけが私の希望である。

同年5月24日、ウェスレーはアルダスゲイト街でもたれた聖書研究会で、ルターの口マ書講解の序文が読まれていた時、福音体験をする。

彼がキリストを信じる信仰を通して神が心の内に働いてくださる変化について説明していたとき、私は自分の心が不思議に熱くなるのを覚えた。私は救われるためにキリストに、ただキリストのみに信頼したと感じた。神が私の罪を、この私の罪さえも取り去

ってください、罪と死の律法から救ってくださったという確証が、私に与えられた。

ここにたどり着く道程も、またこの日の体験も、ルターのそれと酷似している。「私は夜・昼となく考えを巡らし、とうとう神の義と“義人は信仰によりて生くべし”という聖句の結び目を理解した。……それによって、私は生まれ変わって天国の門をくぐったと感じた。」

A. 教理的には：古典的な宗教改革の信仰義認（モラビア派を經由して）

：ウェスレーは英国宗教改革の指導者クランマーによる「悔い改め・信仰義認・善き行い」についての古典的な宗教改革の説教を出版した（存命中36版を重ねる。）

B. しかし、新しい要素が加わった

——それは、モラビア派の「意識的な」回心・「体験の強調」／これを福音主義の特色とするのか、あるいはリバイバリズムの特色とするのかは、別として、悔い改め・信仰義認・新生が、「神学的に」ではなく、「体験的に」キリスト教の舞台に上がる。

…以前、ピューリタンのバクスターが強調していたことが、本格化する。

Treaties on Conversion (1675), Call to the Unconverted (1658) 344

——制度や伝統，信仰信条に捕らわれない、個人の信仰体験が、キリスト教の舞台に上がる。

…時代の用語、experimental religion 272

C. 回心の証しが大きな役割を果たす

●エドワーズ

1734年に、ニューハンプシャーのノーザンプトン、エドワーズのもとでリバイバルが始まる。そのニュースがボストンを經由して英国のアイザック・ワッツのもとにとどき、詳細な出来事の解説がエドワーズの説教二篇とともに英国で出版された（「*A Faithful Narrative of the Surprising Work of God in the Conversion of Many Hundred Souls in Northampton, and the Neighbouring Towns and Villages of New-Hampshire in New England*」）。そのときすでにウェールズのハウエル・ハリスのもとでリバイバルが始まっているが、彼もそれを読んで、ノーザンプトンと同じ現象が、ウェールズで起こっていることを確信した。

エドワーズはFaithful Narrativeの中で以下のように記している。「他人の回心のニュースを、神が私たちの間になされるご自身の働き的手段として用いられるとは、私が知っている限り例のないことである」<sup>\*1</sup>。人の罪深さと認罪に打たれた魂の動きを克明に描き、十字架による神の救いを力強く説明し、信仰によって義とされた心に聖霊が与える変化を描写しているこの本は、イギリスで福音体験をした牧師たちに、「彼らもまたリバイバルをイギリスで体験できるという希望を与えた」<sup>\*2</sup>。

---

\*1 Edwards, *Faithful Narrative of Surprising Conversion* (1737), in Edwards, Works, vol. 4, *The Great Awakening*, ed. C.C. Goen (1972), 176.

\*2 D. Bruce Hindmarsh, "The Reception of Jonathan Edwards by Early Evangelicals in England," in David W. Kling and Douglas A. Sweeney (eds.), *Jonathan Edwards at Home and Abroad: Historical Memories, Cultural Movements, Global Horizons* (Columbia: University of South Carolina Press, 2003), 202.

福音主義神学とそれに基づく回心体験の理解が、イギリス、ウェールズ、スコットランド、アメリカで共有できたのは、神学的な論考や説教だけでなく、もっと庶民的な「回心物語」の出版が大きい<sup>\*1</sup>。それは、単に他人の回心物語にインスパイアされて、自分も同じ回心を求めるという現象的なことだけでなく、ウェスレーなどは、モラビア派から信仰義認の教えを教えられた時、1) 聖書において確かめ、2) 国教会の説教集で確かめ、3) ドイツのヘルンフォートを訪ねて、体験者の声を生に聞き、時に批判的に、時に納得をもって、他人の自分の回心物語を、神学的に整理しようと努めた。

D. 回心体験・福音体験が広がり、定着していくために、大いに役立ったのは、回心物語の出版だけでなく、讃美歌の広がりであろう。

アイザック・ウォッツ(1674-1748) When I Survey Wonderous Cross

エドワーズのNarrativeを英国で出版させた中心人物

チャールズ・ウェスレー(1707-1788) Jesus, the Lover of My Soul

ジョン・ニュートン (1725-1807) Amazing Grace

オーギュスト・トッブレディー (1740-1778) Rock of Ages

今よりテンポが遅いメロディー、十字架、恵み、神の愛

聖書研究会で、野外集会で歌い込む。ムードだけの問題ではなく、福音主義の神学が心に刻まれる。

讃美歌が福音主義のCreedの役割を担うほど神学的、かつ普及的。

E. 啓蒙主義は追い風？

リバイバリズムの明確な回心と新生体験の説教・訴えを受け取り、またそれを広める土壌として、近年、啓蒙主義思想の浸透が取り上げられていることは興味深い。信仰信条を学んで受け入れる「頭の知」ではなく、17世紀の福音主義の世界では、罪の苦悩を越えて、キリストの十字架を個人的に信頼し、たましいの中心で罪の赦しを受け取る経験に基づいた「心の知」であった。これが教派を問わずに強調されてた救いの「確証」の教理となる。

もちろん、啓蒙主義の思想家たちが福音主義者であったというのではない。しかし、啓蒙主義が福音主義者とその主張が積極的に受け入れられ、浸透していく「精神土壌」を作り出していた、というのである。国教という制度、信条的・教理的枠組みを超えて、個人とその経験が判断の基準になっていく。

ベントン批判も多くあることは事実である<sup>\*2</sup>。たとえば、17世紀英国の「心の宗教」の強調は、ロックの思想とは関係なく、フランスのカトリック司教フェネロンなど広く欧州カトリックを源泉として英国に広がっていたわけであるし、ウェスレーのアルダスゲイト体験を導き出したのはモラビア派の敬虔主義であって、啓蒙思想ではない。

だが、宗教的「知」の世界で「個人の経験」を重視するジョン・ロックの影響は、ウェスレーにもエドワーズにも明確に認められる。そして、悔い改め（認罪・自己絶望）、十字架への信頼、新生の喜び、救いの確証という体験が聖霊によって与えられ、それをもってして真のキリスト者となるという「経験」の強調は、ロックの認識論、またそれをもとにした世

---

\*1 ちなみにEdwardsの*The Distinguishing Marks of a Work of the Spirit of God*は、ロンドンで1741年に発行されている。

\*2 Garry J. Williams, "Enlightenment Epistemology and Eighteenth-Century Evangelical Doctrines of Assurance," in Michael A., G. Haykin and Kenneth J. Stewart, *The Advent of Evangelicalism* (Nashville: Abingdon, 2008), pp.345-374.

界観と合致していた、との理解は、ベントン以降多くの福音主義の歴史家が、程度の差はあれ、おおむね認めるところであろう。

## 2. 身軽で柔軟な展開

18世紀の大西洋を挟んだ英語圏では、これまでにない人の動きがあった。産業革命によって都市化が進み、それによって市民社会が主導権を握りはじめ、人口は爆発的に増加し、アメリカや西インド諸島等、植民地への移動、往来も盛んになる。人とともに価値観も流動し、これまでの社会経済の枠組みは廃れていく。国教会は対応できない。そうした社会の枠組みの中にあるキリスト教会に対して、こうした人の動きに合わせて新しい伝道形態を提示できたのが18世紀福音主義を担った伝道者たちであった。いわば、国教会が社会の枠組みの中にある教会、それに対して新しく台頭した福音主義勢力は、その枠を突き破っていった。

ホイットフィールド、ハリス、またウェスレー兄弟のように教会を担任しない者、あるいはエドワーズのように教会を担任する者の別はあるが、いずれにしても広い範囲を巡回して悔い改めを説き、十字架信仰と個人的な救いの渴望を呼び覚ましている。その説教は心に向かう福音的情感と気迫に満ちていた。

### ●ホイットフィールド

「巡回伝道者たちは、次々に場所を移動して伝道するが、それはまさに人が移動し、世界が拡大していく中で神の自由な御霊が既製の枠に捕らわれずに働き出していくことの象徴であった」<sup>\*1</sup>。プロテスタントの歴史始まって以来はじめて、働きを中心的に担ったのは、神学者ではなく、特定の教会牧師ではなく、巡回伝道者であった。その巡回伝道者たちの中で群を抜いていたのがホイットフィールドである。

#### A. 広範囲に移動する伝道者たち

1739年10月にアメリカに渡ったホイットフィールドは（2度目）、フィラデルフィア、ニューヨークを訪れ、そこから南下して1740年1月にジョージアのサヴァナに到達し、説教と孤児院ベテスタ（アメリカで初めて作られた孤児院）の建て上げに尽力し、4月にはフィラデルフィア、ニューヨークに戻った。そのとき彼の説教を聞くために野外に集まった人々は1500人になっていた。アメリカにおける欧州入植地域において、集会のためにこれだけ大勢の人間が野外一カ所に集まったのは、これが初めてであろうと言われる<sup>\*2</sup>。9月には北上して、ロードアイランド、ボストン（ここでの会衆は2万人、町の人口以上を数える<sup>\*3</sup>）、南下してハートフォード、ニューヘイブン、ニューヨーク、フィラデルフィア、その間彼は少なくとも200回の説教をこなした。そして最後はさらに長旅をして11月にジョージアのサヴァナから帰国している。この1年、またその後の彼の生涯で6回も北米巡回伝道をこなし、最後はボストンで天に召されたホイットフィールドのアメリカにおける影響力は絶大であった。

ニューイングランドの長老派教会、会衆派教会に信仰復興運動的息吹を与え、彼の影響下から多くのバプテストやメソジストの伝道者が誕生し、また少し小さめのクエーカーやドイ

---

\*1 Timothy D. Hall, *Contested Boundaries: Itinerancy and the Reshaping of the Colonial American Religious World* (Durham, N.C.: Duke University Press, 1994), 131.

\*2 Noll, *The Rise of Evangelicalism*, 104.

\*3 Whitefield, *Journals*, 472.

ツ敬虔主義の流れもリバイバルの勢いに招き入れることができた。

それは、ホイットフィールドが入植地域によって宗派が異なる様々な地域を自由に精力的に巡回した故であろう。帰国してすぐに彼はスコットランド巡回に入り、長老派の国教会にリバイバルの息を吹き込むことになる。スーザン・オブライエンが、このようにしてホイットフィールドの精力的に巡回伝道によって結びつけた霊的勢力を「Transatlantic communion of saints」と呼ぶ<sup>\*1</sup>。

## B. パブリシティー

また評価すべきは、彼のマーケティング・テクニクとも言える伝道手法であろう。たとえば、北米大陸を巡回していたとき、ホイットフィールドの秘書的存在であったシーワード（William Seward）は、次に移動する町で、前の町の集会でどのような神の御業がなされたのか、どのような回心の証しなどを掲載しながら、ホイットフィールド到着を前にして手紙が出回るように手配していた。手紙はロンドンにも送られた。ホイットフィールドの報告は、アメリカからロンドンのホイットフィールド礼拝場（Whitefield Tabernacle）に送られ、そこでは手紙が到着すると、朗読集会（Letter Days）がもたれた<sup>\*2</sup>。

ランバートは、彼を「福音の行商人」（pedlar in divinity）<sup>\*3</sup>と呼ぶ。消費文化が飛躍的に伸びていく英語圏にあって、ホイットフィールドは、いわばロンドンの市場で、他の日常の商品と同じく、説教をし、安価な福音の雑誌やパンフレットを出版し、福音の真髄を売り込む気概と勢力と魅力にあふれていた。

## C. 問題点

マーク・ノルは、これだけの範囲を短期間に移動し、多くの教会や牧師たちと会い、何百回も説教をして疾風のごとく駆け抜けていく、「ホイットフィールドの働きのある方」にも少々の批判を加える。

ホイットフィールドが成し遂げてきたことは、どのような水準に当てはめても、賞賛に値する。キリスト中心の説教に対するこだわりは灯台の光となった。だが、彼の人柄も働きの目的も誠実さにあふれているが、必ずしも幅広い働きに一貫性があるわけではなく、また深い洞察をもって文化に取り組むことはなかった。いつでもどこでも・情熱を持って・目的にまっしぐら、それが彼のスタイルである。一言で、アメリカのエヴァンジェリカル歴史において後に現れる良い部分も悪い部分も、その多くが、この時点のホイットフィールドに現れていたと言えよう<sup>\*4</sup>。

——「福音の行商人」が良いか悪いか？

## 3. 社会問題への影響力（Evangelical Activists）

---

\*1 Susan O'Brien, "'A Transatlantic Community of Saints': The Great Awakening and the First Evangelical Network, 1735-1750," *American Historical Review* 91 (1986), 811.

\*2 O'Brien, "Transatlantic Community of Saints," 825-862.

\*3 Frank Lambert, *Pedlar in Divinity: George Whitefield and the Transatlantic Revivals, 1737-1770* (Princeton: Princeton University Press, 1994).

\*4 Noll, *The Rise of Evangelicalism*, 108.

- A. 孤児院（ホイットフィールド／アメリカで）、小中学校（ウェスレー）、貧窮院など、慈善運動の世紀（1750～）を生み出す。
- B. 奴隷売買反対（ウィルバーフォースは、ピューリタンのDoddrigeに影響を受け、ウェスレーやジョン・ニュートンに後押しされて、禁止法を議会に通過、10年をかけた）
- C. 1799年のCMS（Church Missionary Society）に始まり、世界宣教の時代が始まる。
- D. 19世紀には、英国で組合運動が展開される。

#### 4. 「福音主義」のアイデンティティーの二面性

A. 英国福音主義の教会史家W.R. Wardは、18世紀の信仰復興運動（福音主義とリバイバル）を、「神学的保守と実践的革新」の合体と呼ぶ<sup>\*1</sup>。276-77

●ウェスレー 1739年にブリストルの炭坑夫相手に野外説教を始め、3千という聴衆を集めていった時、ブリストルの司教ジョセフ・バトラーに呼び出される。ウェスレーは自分の説いている信仰義認と聖化の教えを説明し、バトラーはその正統性に感心して、彼を送り出す。

=ところが、やがてウェスレーは広がりゆく働きの中で信徒を説教者に起用し、野外礼拝をし、巡回伝道者を立てて、メソジストという独特な組織を国教会の中に構築していく。

=しかし、やがて、ウェスレーを指導者とする独特な組織は、煙たがられ、国教会はメソジストを聖餐から排除していく。

=ウェスレーは国教会を愛し、その伝統的神学と典礼に心酔し、「自分が生きている限り、国教会からの離脱はあり得ない」と踏ん張るが、彼の死後、メソジストは独立して教会を形成する。

…あれほど、伝統的に正統な神学説教を、信徒に説き、読ませ、浸透させたウェスレーでも、国教会にとっての彼の「実践的革新」は目障りとなる。

●ホイットフィールド 信仰復興運動の展開は、17世紀の英国カルヴァン派を担った長老派・会衆派から多くの批判を受ける。ニューイングランドのthe Congregational Old Lights、あるいはヴァージニア周辺のThe Presbyterian Old Sides、そしてスコットランドの保守的な長老派は、ホイットフィールドの働きに反対する。信仰復興運動は、17世紀のプロテスタントイズムに聖霊の息吹を吹き込み、また同時にそれを分裂させる結果を生む。

=双方とも改革派の中心的な教理に精通し、賛同していながら、信仰復興運動に反対する者たちは、教会の秩序を重んじ、賛成する者たちは、福音主義の内的・霊的な実質、そして伝道の新しい必要とそれに応じる方策を重んじた。

B. 現代の福音主義は（さまざまな流れに分岐していても）、二つのルーツを持ち合わせている。ルーツの自覚は、その流れによってアンバランスで、16世紀の宗教改革(国教会的・制度的要素はなく、しかし神学的には)に求めるか、あるいは18世紀の信仰復興運動(実践的)に求めるか、に往々にして分かれる。「福音主義」を定義づける時、どちらかに傾く。

A. 福音主義とは、プロテスタント内で、宗教改革における聖書主義（リベラルな聖書理解

---

\*1W.R. Ward, *Protestant Evangelical Awakening*, p.355.



に対抗して)と「恵みの故に信仰のみによって救われる」との教えを強調する、正統派グループであると理解する。

B. 福音主義とは、プロテスタント内で、敬虔な信仰と生活（型にはまった信仰の捉え方、あるいは知的レベルでの信仰に対抗して）を実践し、外に向かっての愛と伝道の信仰的発露を希求するグループであると理解する。

●Aに強く傾いた時の危険性——ルターやカルヴァンにしる、ピューリタン革命のウェストミンスター信仰告白にしる、「国教會的な枠組み」「国教會的教會論」が働いていることを忘れ、その枠組みを日本の、宣教地にある開拓的教會に当てはめると、福音主義の持つ「活力」を失う。

●Bに強く傾いた時の危険性——マーク・ノルの「Scandal of Evangelicalism」が見事に指摘しているように、福音主義は神学的な根のない、場当たりの、教會の公同性、歴史性が見えないな信仰集團と化してしまう。(たこつぼ的知性、お祭り騒ぎ的靈性、etc.)